

立教大学生の学修時間

日 時：2012年11月22日(木) 10時00分～12時00分

場 所：池袋キャンパス マキムホール10階 第1会議室

司 会：

家城 和夫 本学理学部教授 理学部長

参加者：

池田 伸子 本学異文化コミュニケーション学部教授

異文化コミュニケーション学部長

松尾 哲矢 本学コミュニティ福祉学部教授

コミュニティ福祉学部長

森田 翔子 文学部史学科4年次

江頭 翔太 経営学部経営学科3年次

加茂 祐樹 コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科3年次

○家城 司会を務めます、理学部の家城です。今日は、「立教大学生の学修時間」ということで、座談会を行いたいと思います。3名の学生の方と、先生方2名に参加していただきます。きょうのテーマである「立教大学生の学修時間」とありますけれども、この「学修」という字は、たぶんあまり見慣れていないかもしれません。今まで「学習」という字をよく使っていたんですが、最近この「学修」という字を使うようになっていきます。

これが、はやりと言えば、はやりなんですけれども、どこから来たかという、今年の8月に出された中教審(中央教育審議会)の答申から、こういう言葉が使われ始めています。それに、いろいろ

なところで右に倣えをしているのですが、その答申の中では、この学修ということには一定の意味が込められているわけです。

きょうの座談会を始めるに当たって、最初に、その中央教育審議会のところでどういうことが議論されて、今、何を問題にされようとしているのかということ、きょうのテーマとして、少しお話しするところから始めていきたいと思います。

中央教育審議会の答申にはタイトルがありまして、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」、副題が「生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」。こういう名前の答申になっ



家城 和夫

ています。長いタイトルですが、キーワードになりますのは、この「大学教育の質的転換」ということです。今までの大学教育はこのままで、駄目なので、変わらなさい。

その変わるキーワードとしては、大学の中だけではなくて、大学を卒業してからもずっと学び続けられるような、主体的に考える力を付ける、という趣旨の転換をなさい。こういうことが、中教審の言っていることです。

そういうことを言い出すに至った理由というものも、いろいろ書いてあります。少子高齢化やグローバル化、こういうものも最近よくいわれています。われわれ教員世代というのは、高度経済成長期に教育を受けてきた人が多いと思いますが、この20年間というのは、社会的にも大きな変化があって、少子化、大学に入ってくる学生が減ってきたということがあります。そして、逆に、高齢化ですね。年寄りの方が増えてきた。それから、情報化ということもありまして、グローバル化が急速に進んでいる。

こういう変化の下で、今までのようなやり方で大学教育をやっていたのではまずいということがあります。大学の進学率が高まって、18歳人口が減ったということもありますので、大学に入ってくる学生の層も変わってきています。そういうものに、いろいろ対応しなければいけないということで、大学の中でもいろいろな

制度的な改革もあり、今までの大学の歴史から見ると、中にいるとあまり気が付かないかもしれないのですが、この20年はかなり変化しています。

大学の教育というのは講義を受けて試験を受けて単位を取るという大きなスタイルはあまり変わっていないので、表面的にはそれほど変わっていないように見えますが、やはりここも変わってきている。ただ、これが社会的に見ると、やはりまだ足りないと言われていました。かつての大学にはあまり期待されていなかったのかもしれませんが、今の大学の教育が、社会から見てこれでよしとは、どうも受け止められていないようです。その辺から、大学教育の質的転換をとという話がきているわけです。

今回の答申は、いろいろなデータを踏まえた上で、キーワードとしては、成熟社会において求められる能力を身につけるということを行っています。今までとは、大学を取り巻く環境が変わってきているので、特に、少子高齢化の中で、成熟社会という言葉が使われていますが、その中で生きていけるような人を育てることが、社会的な要請だといっています。

どういう人が求められているかということ、一つのキーワードは、先ほど出ましたけれども、主体的に考えることができるような人であるといっています。つまり、何か言われたことをこなすだけではなくて、いろいろな、まだ答えがない問題をきちんと解決できる人です。そういう能力を付けた人が必要なんだけれども、そのためにはやはり、自分の力でいろいろ解決をする、そういう人が必要であるというわけです。

それが実際にできているかということ、社会から見たときに、まだ不十分ではないかといわれています。そのためにもどのように教育を質的に転換していかなければいけないのかということが、今回の答申の大きな内容になっています。

これまで、そういうことがいろいろいわれてきたわけで、主体的に学ぶためには、アクティブ・ラーニングですとか、いろいろな形の授業の改善ということも、今までいわれてきています。ただ、やはり残念ながら、それがこの20年の間でいろいろな成果があるかという、まだ足りないのではないかと。

その一つの指標としていわれているのが、きょうのテーマである学修時間ですね。この学修時間に関しては、いろいろな調査を踏まえてみますと、日本の学生の学修時間は1日4.6時間ぐらいであるというデータが出ています。諸外国の学生から比べると、諸外国というのは欧米のフルタイムの学生を指しているのだと思いますが、だいたい8時間ぐらいというものに対して、日本は半分強でしかない。

半分であっても十分それで身に付いていけばいいわけですが、日本の大学の単位制度は、そもそもどのように設計されているかという、卒業までに120数単位ですね。124単位ぐらいの単位数が必要とされているわけですから、それを8で割ると、半期でもって、だいたい16単位ぐらいを取ればいいことになっています。16単位ですが、このうちの1単位につき45時間の学修が必要な量と、もともと定義されているんです。そうすると、45時間というのは1単位につき、15回の授業回数で計算すると、1回の授業あたり3時間の学修時間が必要になります。この3時間という意味は、1時間は教室で勉強し、残りの2時間は予習や復習に使うという意味です。要するに、実際の授業で受けている時間に対して3倍学修しなさいということです。

16単位ですから、2単位の科目でいうと、1週間に8科目ぐらい取ればいいわけですので、1日あたり1個か2個の授業を取って、それに対して授業を含めて3倍ですから、1日に必要な学修時間は、

だいたい8時間ぐらいなんですね。これは昔できたルールなので、週休2日ではなくて、週6日間で、48時間。ですから、1日8時間ぐらい勉強するというのが、もともとの制度設計だったわけです。

それに対して、現実には4.6時間。これはどういうことかという、もともとは、授業の時間外にも相当数勉強して、それなりに身に付けている、学修しているはずだったのが、どうも日本の学生はせいぜい授業時間プラス少しぐらいしか勉強していないようにしか見えない。これでいいのだろうかということです。

もちろん、時間だけが問題なのではなくて、その時間に十分な質があればいいわけですが、質をいう前に、やはり量が伴わないと質も出てこない、どの学部にもある程度共通の目安として、まず学修時間というものに着目して少し考えてみましょうというのが、ここの視点でございます。実際には、質的転換のためにいろいろなことが提案されておりますけれども、それはきょうのお話の中で少し議論を進めていきたいと思っています。

きょうは、学生の方々に参加していただいていますので、まず、今の中教審の、少し粗いまとめでございますけれども、このことを踏まえて、これをどのように感じるかということ。それから、実際に皆さん、4年生、3年生ですので、これまでに大学の中でかなり勉強されてきたわけですが、ご自身の大学の中で勉強から考えて、これをどのように思うかという辺りを、少し、順にお聞きできればと思います。

では、森田さんから、簡単に紹介を含めてお話いただければと思います。

○森田 文学部史学科4年の森田翔子です。話を聞いていて思ったことは、基準として1日に8時間勉強するというのは、正直なところ、結構多いなと思いました。私はこの大学の4年間の中で、教職課程を取っていたので、そのときの



森田 翔子

授業では、勉強を結構やっていたかなということがあります。ですけれども、その課題がないときは、1日の勉強量も少ないですし、逆にもうすぐ発表があるとか、そうい

うときだと、たぶんもっと勉強しているかなということがあります。

○池田 波があるということですか。

○森田 はい、波があります。

○松尾 教職はどうしてそんなに力を入れてやったんですか。

○森田 教職は、もともと教育方面に進みたいと思っていたので、力を入れてきましたし、課題もレポートが多かったり、模擬授業もあったのでその準備もいろいろしました。それから教職の中で、外に出てボランティアをやったりですとか、介護等体験もありましたので、外で活動する時間も結構あったなと思います。

○家城 ありがとうございます。では続けて、江頭さん。

○江頭 経営学部経営学科3年の江頭翔太です。今回の話を聞いて、私が率直に思ったことは、量から質というところに少し違和感を覚えました。僕の中だと、どちらかというと質から量を確保するのかなと思っています。というのも、僕が1年生のころは、授業外の活動も結構行いまして、たぶん8時間ぐらいやっていたんじゃないかなというイメージではあるんですよね。つまり質の高い授業から量が生じるということです。ただ、一つ

の授業についてはすごく時間をかけたんですけれども、他の授業においてはどうかと聞かれると、全然。授業を受けるだけという形だったという印象があります。

あと、もう一点は、大学の授業の優先順位というものが、大学生活でそこまで高くないということが一つあるような気がします。大学の授業以外にも、バイト、サークルということもあるので。

○家城 サークルのほうが順位が高いということですね。

○江頭 そうですね。そういった、人間関係やお金というものをつくることのほうが、少し優先順位が高いというイメージが、ありました。ただ、その中でも、すごく興味のある授業、いわゆる質の高い授業では、主体的に関わって行って、授業外でもいろいろ活動をしました。

○家城 ありがとうございます。では、加茂さん、お願いします。

○加茂 はい。コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科3年の加茂祐樹と申します。僕の思ったことを2つほど申し上げると、受験するときに、自分の将来の夢を考えたときに、最初に挙がったのが、スポーツジャーナリストになりたいなということでした。その夢を考えたときに、スポーツを社会学から見るという視点が大事だと思ったので、スポーツウエルネス学科の専門教科以外にも社会学部の授業も積極的に取ろうと思って、単位にならなくても、今、社会学部の授業も受けていますし、興味がある授業だったら、空いた時間に受けています。その垣根をなくすということが重要ななと思いました。

あと、主体的な学びということなんですけれども、主体的な学びに結び付くには、まず、先生の方から与えられたものやってみることから始めてみるのも、ありなかなと思います。例えば、この間もあったんですけど、コミュニティ福祉学部の卒業生が中心となって2007

年に創設されたコミュニティ福祉学会で松尾先生に発表してみないかと言われて出てみて、すごくいいなと思いました。

あと、10月の末に、スポーツ政策をいろいろな大学の人が持ち寄る大会があったのですけれども、そこで主体的に政策を考えたりしました。そこで他大学の人とつながりもできましたし、それで今度そのつながりを使って、いろいろなイベントにもその友達と一緒に参加しようという話にもなりました。そういう受動的なきっかけから主体的に変わるということもあるなと思いました。

○家城 先生方、学生のお話を聞きになって、ご意見はいかがでしょう。

○池田 私が一点、思ったのは、森田さんの話を聞いていて、教職を取っている学生は、学修時間がどうしても多くなりますよね。すごく大変そうですし、やはりそこで教員免許という資格に向けて、すごくかっちりプログラムとして完成された形がつけられているというところで、学生が学びにずっと乗っていきやすいという部分があるんだろうと感じました。

それから、江頭さんのお金をつくる、人間関係をつくるという、それも大学生生活の大切なプライオリティだというお話を聞いて、やはり大学としても、教育というか授業をデザインする側としても、お金より人間関係より魅力的だ、面白いなと思ってもらえる授業をしないと、学生の優先順位はどうしてもそちらに向かうんだということに気づかされました。

それから、加茂さんのことについては、まずは教員側から与えてもらうことをきっかけにして、学生がどんどん外に出ていくという可能性を教えていただいた気がしますし、加茂さんがご指摘いただいた活動というのは、全部授業ではないんですよ。だから、学びとか学修の中で、おそらく学生の記憶に一番残らないのは講義、いわゆる大学の先生方が考えている講義形式の授業であって、それ以

外にもどんな学会に連れて行くとか、自分でイベントに参加するとか、学修、教室以外のところでの学びの経験というものを学生に与えてあげると、それが家城先生のおっしゃっ

た、いわゆる学習方略、学び方を学ぶ、どうやって自分で学んでいけばいいのかということに身を付ける第一歩になるのかなということを感じました。

○松尾 コミュニティ福祉学部長の松尾ですけれども、この中教審の考え方の背景には、人口減少社会や少子高齢社会という時代背景がある。これだけ人口が減るとか、高齢者がこれだけの高い割合を占めるといって、今まで人類が味わったことがない社会となる中で、課題はたくさんあるけれども答えがないという時代になっていると思います。

そのときに、要は高校までの「正解はどれか」という、正解を選ぶような学びから、答えのない中であって、ベストだとは言わないけれどもベターだという解に導ける力をどうつくるかということが、必要になってきます。

その入口として、まず今、何が課題なのかを把握することから始めなければなりません。

課題についての認識は皆さんに共通にあるように思いがちですが、例えば、「今、スポーツ界の一番の課題は何だと思いますか」と、こう聞かれたら、森田さんだったら、「え、課題ですか。いや、スポー



池田 伸子

ツのことはよくわかりません」というような形で、それぞれの人が有する興味関心によって、課題の立ち上がり方は全然違うと思います。

課題は常にそこにあるものではなくて、その人の中で立ち上がってくるものだと思うんですよ。興味関心があるところはものすごく課題を感じるし。

要するに、まず自分が興味関心を持つ領域があって、その中で課題は何だということを見つめる力があって、その課題に対してどのようにアプローチすればよいのかという、いわゆる主体的な学びの原点になるような、学びの手法をどこで学ばされるのか、学ぶのかということが、実はポイントになってくると思います。課題を見出せたらつぎにどのようにその課題にアプローチしていくかが問題となります。

学生は、「高齢者の方が困っています。だから、それを支える支援者が必要ですよ」というように、課題があったら、即、解決策を出そうとしがちです。しかしながら、それでは平板な議論にしかありませんし、よりよい解決策は導けません。

課題があったらすぐ解決策ではなくて、誰だって高齢者を支える支援者を増やすべきだと思っているのに、高齢者を



松尾 哲矢

支える人がどうして増えてこないんだろうというように、その理由とか、その背景にあるものを、きちんと掘り下げていかない限りは、やはり新しい解決策は出てこない

のではないでしょう。

今、取り組むべき課題とは何か。その課題に対してどう掘り下げていけばいいのか。そして、それをどういう形で、解決策に結び付けていけばいいのかという、主体的な学びを引き出し、学びの作法ともいべき学びをやはりきちんとやっていくことが重要だと思います。

先ほど森田さんに、なぜ質問したかという、先生になりたいからという興味が最初にあるんですよ。興味があるから、すごくそこに課題意識というものが立ち上がりやすい。それで、さまざまな課題が与えられて、そして、なおかつ実際に発表する場面がある。そうなったときに若者言葉でいういわば「やばい」という思いとともに主体的な学びが始まったのではないのでしょうか。

江頭さんの場合も、質の高い授業を受けたら、それは興味がありましたとおっしゃったでしょう。それこそ興味関心を喚起し、課題が立ち上がっていくような授業、「ああ、そうか。じゃあ、こういう問題もあるんじゃないか。」と課題が立ち上がって、その背景には何があるんだという掘り下げのきっかけをくれるような、そういう授業だったのではないかと思います。

それで、加茂さんの場合は、スポーツジャーナリストになりたいという興味関心を元にスポーツ政策コンテストに出場することを契機として、最初は、「まあ、なんとかなるだろう」という感じでやっていますけれども、近づいてくると、「やばい」という思いが強くなります。「やばい」という感覚は、「きちんとやらないと、本当に向き合えないと今のままではまずい」ということですよ。そういう世界をつくっていくことが大事ですね。

答えのない時代にあって、大学生がいきなり主体的に学ぶかといったときに、主体的にならざるを得ない、あるいは、自分でやりたいといった意欲を喚起しつつ

学びの流儀を磨いていく必要があると思います。

○家城 ありがとうございます。いろいろな点について指摘していただいています。これを、これから取り上げていきたいと思っています。今、松尾先生に非常にうまくまとめていただいたので、これが一つのポイントなのかなと思います。中教審の答申の中でも、学修時間が4.6時間で少ないから増やせといっていますが、それは、学生がやればいいのだというだけではない。例えば、先ほどの森田さんの話にもありましたが、いろいろレポートの課題を教員のほうから授業で出す。それをやれば、確かに増えるかもしれないのだけれども、そういう問題でもないんだらうということがあります。

その点が、今の松尾先生のご指摘で、加茂さんのお話にもあったと思いますけれども、単に与えられたものをこなすということで時間を増やすという、量だけの問題ということは、やはり違うと思うんですね。それを自分の中で、主体的に課題意識としてどのように転換していくかということが問題になるかと思えます。

それは、やはり一つ一つの、個々の授業の問題ではなくて、先生のご指摘のように、4年間の自分の学びの中で、全体として捉えていかないといけない。最初にいろいろなスキル、学びの手法から始まって、それを卒業までにどうやって持っていくかという観点がすごく大事なことなのかなと思います。

その観点から、先ほど松尾先生のお話にもありましたように、まさにいろいろなきっかけで、そういう学びをやらされてきたかと思いますが、今、3年間、4年間を振り返ってみて、自分としてはどうだったのか。今までに、いろいろ面白かった授業もあるし、自分としてはもう少しできたかなということもあるかと思うんですが、今の松尾先生の観点から学びを振

り返ってみたときに、どうかということをお話いただければと思うんですが。

また、どういう授業であれば、もっと自分なら学べるかとか。あるいは、あまり悪口を言う問題かもしれないけれども、もっとこういう授業であつたらよかったのになんということがあれば。自分の学びの中で、どのようにやっていけば、もっとよりよくできたかなという観点がもしあれば、少しお話いただければと思います。

○江頭 質の高い授業と説明したんですけれども、経営学部では、BLP (Business Leadership Program) というプログラムがありまして、それが一番質の高い授業に当てはまるのかなと思います。というのも、学生に対して、興味関心というものを持たせて、それから学生の思考がすごく広がるようにプログラムされているカリキュラムなんです。

BLPの内容は、企業の方々と提携して、課題解決プロジェクトを行うというような形のもので。入学してすぐに大きな会場を借りて、そこで初めての友達と仲良くなって、グループワークをやっていくという形です。実際に企業の人と関わったり、興味を持って取り組みました。その後プレゼンの機会も多くあって、自分の考えたものを披露するという場所と、その前によく、自分で考えてみるということが多くある授業だったので、それはすごく質の高い授業なのかなと受け取っていました。

○松尾 BLPはよく聞くけれども、BLP以外の経営学部の授業の中で、そういうものはないんですか。

○江頭 そうですね。個人的に興味を持つレベルということだと、ありますけれども。それだと、プレゼンのようなアウトプットする機会というもの、あまりありませんでした。興味関心を持ったレベルで終わってしまうというような、そういう授業が多いですね。

○池田
アウトプットを行う機会があまりないという話が今あったのですけれども、そんなはずはなくて、今、大学の教員のほうも、それなりに工夫をしている先生方は結構いらっしゃると思うんですね。



江頭 翔太

経営学部や、コミュニティ福祉学部のように、実際に出口とつながる、外の世界というものがかなり近いところにある学部は、例えば経営の学生であれば企業だったり、コミ福の学生であれば、そういう福祉関係の関連の施設というところがあったりするのですけれども、そうではない学部の授業というのも大学の中にはあって、例えば授業の中にプレゼンテーションを入れたりとか、発表させるという機会を、置いている授業は結構あるんじゃないかと思うんですよ。

だけれども、学生からすると、なんとなくそのアウトプットはアウトプットとして認識していない。つまりは、教室の中で知っている学生の前で、知っている先生だけが見ていてやるプレゼンだからですよ。けれども、外の人、例えば企業の人はずらっという、その人前でプレゼンをやるという、やはり意気込みと心構えが非常に変わってくるということなので、おそらくそのプレゼンというかアウトプットというのは、関わる人が重要ではないでしょうか。それが企業であったり、そういう人でなくても、例えば全然自分

の知らない人。自分と世代が違う人が自分のプレゼンを聞くという、そういう経験があるかないかで違うのかなと思いました。

○家城 今の経営のBLPというのは、実は、中教審の答申の中で非常にうまくいっている例として取り上げられているんです。そういう意味では、先進的な例であることは確かなんですけど、たぶんこれは学部によってかなり違うんですね。なので、他の学部で同じようにできるとは限らないんだけど、それをお聞きになって、自分の学部ではどうだろうかということ、少しお話していただけますか。

○森田 アウトプットで外の人を巻き込むという話で、私がこの4年間で、教職以外ですごく印象に残った授業が2つあります、1つが2年のときに1年間フィールドワークをやった授業と、あと4年の前期でやった、これは社会学部の授業だったんですけど、まちづくり論という授業です。

フィールドワークのほうは、ゼミの先生がその年に担当されていて履修したのですが、千葉県の銚子市に行って、銚子市の中で興味のあるテーマをそれぞれ自分で見つけて調べていくという授業でした。私はそのとき2年だったんですけど、そのゼミの3年生の先輩とか、大学院生の方や、社会人をやりつつ大学院にいるという方など、本当に幅広い学生がいて、その中で一緒にできたということが、すごく勉強になったし、いろいろなお話が聞けました。それで、最後に冊子を作って、銚子市でお話を伺った方にお渡しするので、外の人のお話を聞いたり、最後に論文を書いてお渡しするというところで、やはり印象に残っています。

もう一つは、今、卒業論文で神楽坂について調べているんですけど、社会学部のまちづくり論という授業で、その神楽坂のことを扱う授業があったの

で、それで受講したんです。それもやはり外にフィールドワークに出て、お話を伺って、最後は神楽坂の住民の方に向けて、発表をするという機会があって、それもやはり外の人と関わるということで、すごく印象に残っている授業です。

○加茂 アウトプットという観点でいえば、一番実感できたのはやはり3年生での専門演習だと思います。専門演習ではスポーツ社会学の見方を磨きながら、日本のスポーツプロモーションを主体的に考えていきました。そこで先ほども述べましたが、(財)SSF 笹川スポーツ財団が後援して実施された「Sport Policy for Japan 2012」という日本スポーツ政策コンテストに出場しました。このコンテストは、大学3年生が日本のスポーツ政策を提案するというもので今回は、一橋大学、早稲田大学、慶応大学をはじめ13大学、23チームが出場して競いました。そこで幸運なことに私たちのチームが最優秀賞を獲得することができました。ユースオリンピックを2030年に東北で開催することをねらいとしたものでしたが、課題の設定から掘り下げ、政策の立案まで何度もメンバーで話し合い、夏のゼミ合宿では、4年生、大学院生の前でプレゼンをし、さまざまな指摘を受けて、修正を繰り返しました。



加茂 祐樹

大会1週間前には全て本番同様のリハーサルも行い、質疑に備えて想定問答集も作成し大会に臨みました。そして大会後は、コミュニティ福祉

学会でも発表をさせていただきました。大変よい経験となりました。

○松尾 フィールドワークやアクティブ・ラーニングの特徴は、自らが有する課題に対して、自らが主体的にかかわって、解決の糸口を経験的に探りながらアウトプットまでもっていく点にあります。それは主体的に「体験」を「経験」にする営みとしてもとても重要です。

日ごろ私たちはさまざまに体験をしているわけです。お昼ご飯を食べるのも電車に乗るのも体験の一つです。しかし、体験が体験のままでは深い学びにはなりません。その無数の体験の中から、「なるほど、そうか」と新しい気づきを与えられ、新しい発見へとつなげるためには、「体験」で感じたものを反省的に振り返る。そのプロセスのなかで初めて「意味ある経験」となり「深い学び」へとつながっていくのです。その意味で、アウトプットを伴うということは、深い学びのための重要な営みだといえるでしょう。

例えば立教大学では、サービス・ラーニングという、いわゆる市民社会の成員としてなすべきことは何かということ、きちんと経験を持って学ぶカリキュラムづくりが進んでいます。その学びのプロセスとして、事前に課題に関する学びをした上で実際にフィールドに出て活動する。活動自体は、いわば体験なわけですね。その体験を体験のままでは終わるのではなく、振り返りの事後学習を重視する。先ほど出ていたように銚子市に報告書を出すとか、コンテストに出場する、報告をする。その振り返りのプロセスの中で、深い学びへと、経験へと深められると思うんですね。

コミュニティ福祉学部にインターンシップという授業があって、海外インターンシップとか、NPOとか、企業とか、官公庁などにインターンシップに行っています。先日、報告会があって、インターンシップの受け入れ先の方々にもおいでい

ただいて、コメントをもらいました。ものすごい緊張感の中で、振り返りながら経験化していくよい報告会だったと思います。事前、活動、事後のプロセスのなかで、体験から経験へとどう深めていけるかが、主体的な学びを導き出す質の高い授業の一つの形として重要だと思います。

さて、アウトプットを伴う授業の意味について考えてきましたが、全体のカリキュラム体系における位置づけについても考えておく必要があると思います。学生は、学生の日線目録で日常的な活動や課題意識みたいなものに引っ掛かってくると、興味関心を持ちますが、立ち上がってきた課題意識に対して、自らの経験や常識観に従って判断しようとしがちです。課題に対してアプローチする上で、講義で学ぶ理論、これは課題に対する新しい見方や考え方を提供しているのですが、自らの課題に引き寄せてその理論を活用しようという構えやスキルが弱い気がします。自分の関心のある課題と諸理論の距離が遠くて、へたをすれば別物と捉えてしまう傾向にあるように思います。

例えば、森田さんであれば「課題にアプローチする新しい視点はないだろうか、そうだ、まちづくり理論だ」という気づきからより高いレベルの学習につながったのだと思います。江頭さんがBLP等での課題に向き合う上で経営理論を活用するスキルがさらに高まれば、「これは使える」と、質といういい方は少し違うかもしれないけれども、学部の講義の授業がどれも課題に活かせる宝石箱のようになる。

質の高いカリキュラムを展開する上で、自らの問題意識と諸理論との距離、アクティブ・ラーニングの部分と、いわゆる講義の部分とを接合するようなカリキュラム上の体系化の見直しと接合を促す仕組みが重要だと思います。

○池田 そのこのところは、もうたぶん各学部、各研究科で考えて一応設計はしているんですよね。1年生から4年生まで。だけれども、現在でもそのこのところは気づけない、気づかない、気づきたくない(笑)。松尾先生がおっしゃるように、そこをどうにかして橋渡ししということになると、学生に対して、さらに行き届いた、手を引いて橋を渡ってあげるような。「こっちはですよ、こっちはですよ。ほらね、ここでつながっているんですよ」というような大学のカリキュラムになってしまうんですよ。

私はそれにはものすごく反対で、大学というのは、やはり一応高校の上の社会に出て行く前の最高教育機関ですよ。社会に出て行く前の、そういうところで学んでいるんだということを、まず、私は、入学して直後に学生が知るべきだと思う。高校までの学びと大学での学びというのは全然違う。きちんと自分で自立的にやっていかないと、面白くもないし楽しくもないし、進級もできないという、そういう経験をなるべく早いうちに学生にさせたほうがいいと、個人的に思っています。

痛い思いをすれば、どうやったら痛くないか、どうやったら次にその痛い思いをしなくて済むかということは、どんな学生でも考えると思うんですよね。その考える中で、「あ、こうすればいいんだ」という方法を学んでいくという。そういうことも必要なのではないかなと思います。

どうしても、一步一步、足を踏み外さないようにレールを引いてあげれば、こう来るだろうと、教員は考えがちなんだけれども、引いてあげても来ないんですよ。どんなに引いてあげたって、来ない学生は来ないんだから、一回そのレールから落としちゃえばいい。そこで痛かったという経験が、私は大事だと思っているんですけども。



○家城 答申の中で、プログラムとしての学士課程教育なので、やはり世間一般というか、文科省的に言うと、きちんとラインを引いてやりなさいというのがありますが、池田先生の意見をお聞きすると、そういうところもあるのかなと思います(笑)。

今までのところを、少し軽くまとめてみると、皆さんそれぞれ、アクティブ・ラーニングを中心として、いろいろ興味のあるところは一生懸命勉強する。だけれど、それが全体的なところにはあまりつながっていないようであると。それは、カリキュラムというか体系ですね。学びが自分の中でどのように体系化されているかということが、まだ弱いということのかなと思うんです。

それを、池田先生流には、最初の初日のところで自分で気づかせるということなのですが、一方で、大学としては、学位授与方針というのですが、聞いたことがありますか。ホームページにも載っていますし、実は、履修要項にも、最近では載るようになっていたのですが、それぞれの学部で、どういうことを身に付けて卒業してほしいかという方針を決めているんですよ。見たことがありますか。

○江頭 ないですね。あまり意識したことはありませんでした。

○家城 体系化というときに、やはり自分のゴールがどこなのか。それに向けて、例えば自分が面白いと思ったこと、あるいは必修みたいな形で、これはやれとい

われたことを、自分の中でどう位置付けるかということが必要なのかなと思います。それについて語ってもらおうと思ったのですが、それを知らないと言えないですね。

○池田 入学してすぐ、124単位について、1年生のときに何を取って、2年生のときにこうなるとい、その履修マップというか、履修計画みたいなのを立てましたか。

○家城 そういうことを今までに意識したとか、あるいは自分の学ぶ中で、何でこういうことをやるんだろうということを考えたということは、ありましたか。

○江頭 それこそ先ほどの優先順位の話になってしまうんですけども、僕は今、寮に住んでいるのですが、その寮が県人寮なんですよ。佐賀県人の寮なんですけれども。そこが、上下関係が厳しくて。大学に向ける力というのを、最初、そがざるを得なかったんですよ。

○池田 そんなにすごいですか。

○江頭 結構、初期の段階はすごく寮のマナーやルールをたたきこまれますね。なので、履修計画としては、もう本当に先輩に聞く程度のレベルで、もう適当に。

○松尾 取りあえず決めちゃえというね。

○江頭 最初の段階はそういう形ですね。ただ、自分の目標というものが、大学後にあったので、一つ一つの授業に対しては、きちんと時間をかけてはやっていました。ただ、大学側のカリキュラムの目的とか、人物像みたいなところは、把握できてなかったですね。

○松尾 1年生のカリキュラムというよりも、4年間、どんなふうにして過ごそうかなと考えられたらどう。

○江頭 そうですね。それを考え始めたのが、2年生ぐらいで、1年生は本当に。

○松尾 とにかく授業。

○江頭 そうですね。火消し処理みた

いな形で、もう問題となった目の前にあるやつを、どんどん。

○**教員一同** 火消し処理(笑)。

○**江頭** 単位を取れそうなやつをすごく頑張るみたいな形で、何とかやりくりしていく形だったんですけども、2年生からはある程度、「英語力を高めよう」であったり。僕も教職を取っているんですけども、最初はどたばたして取れなかったもので、2年生から取ってみたりという形で。あとは、そうですね、ゼミ活動が始まったので、主にその3つの軸で、履修を構成しています。

○**松尾** 英語力、教職、ゼミ活動、この3つを軸にして、構成してみよう。

○**江頭** そういう形で考えましたね。2年生ごころは。

○**松尾** アルバイトとか、正課外の活動はどうですか。

○**江頭** アルバイトはですね、不定期的のものをやっていたんですけども。2年の後期ぐらいから力を入れ始めたという形ですね。自分は興味というか、機会が来たらどんどんやっていくというタイプだったので、あまり見通しを持ってやるというよりは、2年の後期にある程度、時間ができたので、定期的なアルバイトを始めました。

○**松尾** 江頭さんに聞きたいんですけども、要は、学修時間が短いと。4.6時間だというには訳があって、みんな忙しいでしょう。相当、学生は忙しい。アルバイトというか間を空けるのが、すごく怖いとか。暇な自分が怖いとか、分からないけれども。そこを、とにかく埋めてしまおうというように、埋めるものが、勉強というよりアルバイトみたいな形でね。これは必要に応じてというのは、当然あるけれども。それで、すごく圧迫されてくるというか。勉強時間が当然、相対的に減ってくるというか。

○**江頭** そうですね。僕の場合はそういった形ですね。

○**松尾** そうするとね。そのこととゼミ、教職、英語と、どう折り合いをつけながらやられているんですか。

○**江頭** 自分の中ではある程度余裕を保っていたので、休みの期間というものもきちんとつくっていたので、そこで何とかしていました。主体的に学ぶというよりは、どちらかというと先ほどの、与えられたものに対応するという形で、何とかこなしていたのだと思います。

○**池田** こなすという感じだよな。

○**江頭** はい。

○**松尾** 今は、先ほどの3つの軸で、自分なりに構成できているなという感じですか。

○**池田** 3年生になってからですね。

○**江頭** その軸が結構変動しまして(笑)。主に、アルバイトというところとゼミ活動。あとは、教職もまだあるんですけども、そこは主体的には学べているかなと。先ほどおっしゃった、体系的に学ぶということで、結構ゼミ活動でそういった指摘を受けるので「あ、この授業、ゼミ活動のときに使えるじゃん」という形で、そこは結構できているのかなと思いますね。

○**森田** 私は履修を組むときに、1年の最初からまず英語がありました。まず英語を入れて、それから教職で必要なものを入れて。3年までにほとんど単位は取り終わりたいと思っていたので、1学期で取れる上限まで考えて、他に興味のあるものを入れていくという感じでした。

○**松尾** 何で3年生までに終わろうとするんですか。

○**池田** どうしてみんなそう思ったりするんだらう。

○**森田** 4年生は、また忙しいだろうと思って。

○**池田** でも、3年生のほうが忙しくないですか。就職活動とか。

○**森田** 忙しかったです。

でも実際には4年の前期がすごく忙し

くて。結局、3年生までに卒業要件は取り終わったんですけども、教職のほうを取り終らなくて、他に、教育実習の準備があって、それから、先ほど言ったまちづくり論の授業も取ったりして。そうしたら、結構やりがいはあったんですけども、なかなかきつくて、忙しかったですね。今も、後期も、火、水、木、金と大学に来ています。授業は1個とか2個なんですけれども。結局まだ教職の単位が取り終わってなくて。社会科の免許なんですけれども、中学社会、地理歴史、公民の3つを取ろうと思うと、結構満杯です。

○池田 そうすると、教職が軸ですか。

○森田 軸でした。

○池田 4年間のですか。

○森田 はい。1年のときは、やっぱりずっと授業が中心で、あと、1年だけちょっと部活に入っていて、ボート部のマネージャーをしていたんですけども、そのボートで他は埋まって、あとは、アルバイトをちょこちょこやっていたぐらいでした。2年生になって、ボート部のマネージャーを辞めて、それからはアルバイトと、自分で弓道をやりたいなとずっと思っていたので地元の弓道教室に通ってやっています。ですから、2年以降は授業とアルバイトと弓道です。

○家城 加茂さんは、何かありますか。

○加茂 履修計画という意味では、1年生のときは、教職もとろうかな、スポーツジャーナリストに関係する科目もとろうかな、と考えていました。その一方で、なんとなく3年生までには終えないと就職活動が大変なのではないかという漠然とした不安もあって、3年生までには履修を終えようと考えていました。そのこともあってか、コミ福だったら1学期に24単位ですか、24単位まで履修できると聞くと、友人と何単履修したのかという話になって、「俺は22単位」と言ったとして、別の人が「24単位」と言うのと、「あ、

やばい」となったりします。結構、2単位は大きいのかなと、響いてくるのかなと思う所があって、なんとか単位を埋めようとしていたように思います。

また教職も最初取っていて、保健体育の先生になる授業も一緒に取っていたんですけども、結構忙しくなってしまう。それに、教育学科でまじめに先生に向かってなろうと思っている人と、ついでに教職も取ってしまおうという人が同じ教壇に立つと思うと、ちょっと躊躇してしまいました。また、入学当初、スポーツジャーナリストになりたいの思いもあったので、ついでに教職を取るということではなく、自分の興味のあることをもう少し広げていこうかなと選択をしたのが、1年の終わりぐらいでした。その後、ジャーナリストではなく、もっとスポーツの問題をいろいろ勉強して行って、もっと日本のスポーツを大きく変えたいなと思うようになりました。

先ほど3年生までに履修を取り終えるとあったんですけども、僕も実際そうになっていて、もう今回取り終わるぐらいの感じで取っているんです。なぜかと考えてみたら、基本的に手帳をみんな持っているじゃないですか。書き込んで、手帳人間になっているのかなと思っていて。

あとサークルは登山をやっているんですけども、先ほど言った手帳人間から、手帳も全く見ない、携帯の電波もつながらないということで、結構リフレッシュできて、サークル活動が結構自分の中では大きいかなと思っています。

○池田 手帳人間から、携帯の電波もつながらないところでリフレッシュするというのを聞くと、何か、その辺のサラリーマンみたいですね(笑)。手帳人間だから、空いていると何か埋めなきゃと思うわけでしょう。

○加茂 そうですね。

○松尾 学びの軸と主体的な学びを考える上で、自分なりの世界観や専門とす

る領域での見方や考え方、例えば、私は、学部時代は教育学部に所属していたのですが、教育学部であれば、教育観を自分なりに考え続けることも大切だと思います。私は、学部時代、「人が人に教えることなど果たして可能なのか」、「教えるとはいったい何なのか」、「自分に何ができるんだろう」と4年間考え続けていました。そのなかで少しずつ自分なりの教育観を形成していったと思います。たぶん経営だったら経営観みたいな、もっと広く言えば、自分とは何か、人とは何か、社会とは何か、幸福とは何かといった根本課題を持ち、考え続ける、そのなかで自分なりの見方や考え方を創っていくという営みが重要なんじゃないかと思います。大学の時期は、そういうものをつくり上げていく大事な時期だと思います。

そういう意味での課題の軸のようなものについて、何か考えられたことはありますか。

○江頭 そうですね。常にこう、自問自答というか、自分に対してそれでいいのかということ、ずっと考えていました。というのも、高校時代に、結構集団を率いる経験をさせてもらったんですよね。そういった経験から、大学のビジネス、リーダーシップ・プログラムに興味がありました。その授業の中で、うまくいかない自分がずっといまして、自己嫌悪みたいなものは、ずっとありましたね。大学1、2年生のときですね。あまり目標が定まっていなかった時期に、たぶんそれをすごく感じていたと思うんです。

○松尾 今、あなたが一番の課題は何ですか。社会に対してでもいいし、経営学的にも、何でも構わないんだけど。

○江頭 これから就職活動なので、その中で企業とか自分、あとは業界、日本全体、世界全体という、いろいろな情報がある中で、自分はどうあるべきのかなというの、今後ずっと考えていか

なければいけない課題かなと。

○松尾 それが一つの軸になるのではないかなということですよ。

○江頭 そうですね。

○池田 ちょっと口を挟んでいいですか。今の、江頭さんが、自分で自問自答するきっかけになったことというのが、高校でリーダーとして成功体験を持って大学に入ってきたんですよね。そこで、大学の授業を受けることで、何かうまくいかない、思ったように自分がうまくできないという経験をする中で、思い始めたわけですよね。

○江頭 そうです。

○池田 でしょう。だから、越えられない経験をする中で、あれ、というふうに、そこから考え始めるものだと思うんですよ。

○家城 それはあると思います。

○松尾 壁にまずぶち当たらせてみるという、こういうことですね。なるほどね。

○森田 私も松尾先生と同じで、本当に先生になりたいのかとか、考えたことはあります。

○池田 になりたいのか、から考え始めたわけですね。

○森田 になりたいのか、からです。

○松尾 教育とは何か、ということを考えたわけではなくて。

○森田 教育とはということよりも、自問自答という感じです。

○松尾 自分も教師になれるのかなあ、ということですね。



○森田 今も思っています。

○松尾 教育という営みって、何でしょう。自分の中で、どういうふうに整理していますか。

○森田 私が教育に携わりたと思ったきっかけは、小学校4年生のときだったんですけれども、なぜかそのときいろいろ悩むようになって、そのときに話を聞いてくれたのが先生だったんです。それで、自分もそういう人になりたいと思ったのがきっかけだったので、私もいろいろ悩んでいる子どもたちの話を聞いてあげられる人間になりたいという、思いがありました。

○松尾 なるほどね。だから、ずっとそれを考え続けているわけですね。

○森田 ですけども、本当になりたいのか、本当にそれでいいのかなと思ってます。

○松尾 そういのはずっとあるよね。

○森田 ずっと思っています。今も悩んでいます。

○松尾 分かります。

○加茂 高校卒業して就職してもいい中で、大学進学を選んだということは、大学4年間で時間を買っているのかなと思っていて、その4年間、時間を買って、どこからでもいいので吸収しようと思っています。だからもう、変な言葉で言うとふらふらしているんですけども、吸収しよう、4年間吸収して、就職できればいいなと漠然と思っています。

自分の経験から言いますと、小学校からいろいろなスポーツをやってきて、そのときに言われるのが「スポーツマンだから」とか、「スポーツマンはそうだよな」みたいなことを言われるときに、何か境界がある気がしています。そのイメージというのが、日本人独特の感覚ではないかと思っています、そのイメージを変えたいと、今のところ漠然と思っています。具体的にはまだ分からないんですけども、そういうふう考えて勉強しています。

○家城 今の話を聞いていると、一つは、課外のアラバイトやサークルというものは、すごく満杯にしてやってきたんだけれども、全体のところでは、何というんでしょうか、その場その場でやってきたというような感じ。先ほどの「火消し」ではないですが、そういうものを感じます。

皆さん、きょういろいろなお話を伺ったんだけれども、もし、もう一回1年生に戻ってやり直していいよと、18歳に戻ってやり直していいよと言われたら、どうですか。特にできれば、池田先生の話にありましたけれども、大学のカリキュラムや教え方が、こんなふうであつたら、もっと自分として身に付くものがいっぱいあったのになというようなことがあれば、感想というかな、大学としてもっとこんなふうにしてもらったほうが、自分にとってはよかつたという視点があれば、ちょっとお話いただけますか。

○江頭 1年生からやり直せたらという話と、カリキュラムについてですね。

○家城 はい。もし、もう1回、年を戻して、今からもう1回やるとすればですね。

○江頭 率直な意見としては、やり直したくないですね。あの苦労を、もうしたくないなという感じ。

○松尾 結構大変だったんだね。

○江頭 まあ、そうですね。

○家城 そうすると、自分にとって、この3年間で十分身に付いたと思いますか。それとも、もっと別のやり方のほうがよかつたかというように思いますか。

○江頭 そうですね。質という面で向上できる部分は少なく、量という面では変えられたかもしれません。当時はすごくがむしゃらにどんどんやっていった結果という形で、あまりいろいろやり方を工夫できるポイントはなかつたかなという印象があります。

○家城 今から考えると、もっと早い段

階でこんなことを言ってくれるとよかったのにというようなことはないですか。

○江頭 ああ、なるほど。結構ゼミ活動中心に、他の授業との関わりみたいなものをすごく見つけられました。ただそれは、ゼミの先生が自分たちゼミ生に対して、一つの勉強だけでは駄目で、いろいろな授業をちゃんと受けろよという話をされていたので、自分はそういうふうに、いろいろなところに意識を向けるようになったので、そういう説明というのをある程度強く言ってもらえると良かったと思います。

○池田 強くね。

○江頭 はい。印象付けるように、何か一番の最初の段階で。

○家城 実感するのに時間がかかるのですかね。

○江頭 そうです。はい。

○家城 それを、もう少し効果的というような感じでしょうかね。

○江頭 はい。もし、それを受けていたら、もしかしてBLPというところにおいても、他の学問といろいろ関連づけられたかもしれません。

○松尾 そうだね。先ほど言ったように、きっと離れてしまっているんだよね。

○江頭 BLPのときは、他の授業はあまり関係なしで。それだけという形になっていました。

○松尾 なるほど。

○江頭 結論としては、またああいう苦労はしたくないなという感じですね。1、2年生のときを思い出すと。

○松尾 よほどきつかったんだね(笑)。そうか。よく頑張ったんだね。分かりました。

○家城 森田さんはいかがですか。

○森田 私も、この4年間、これはこれでよかったかなとは思っています。でも、今もいろいろ体験したこの気持ちを持ったまま18歳に行けるなら、これまでやってきた選択とは、違う別の道を進

んでみたいです。例えば、ボート部だったらボート部をもう少し続けていたらどうなったかとか、いろいろ比較して、もう少し考えたかったなと思います。

あと、大学1年のときに塾講師のアルバイトをやっていて、ちょっと途中できつくて辞めてしまったんですけども、それももう少し続けていれば、自分の進む道ももう少し定まったかなという思いもあったりするので。そんなに後悔はしていないんですけども、ちょっと別の道も、戻れるなら知りたいなと。

○家城 そういう経験の話先輩からいろいろ聞くということは、プラスになるんですかね。例えば、今、あなたが言ったようなことを、1年生に話してあげれば、1年生の人たちには、もっとプラスになるということは、あるんでしょうか。

○森田 ああ。どうなんだろう。

○池田 まだ3年ですけども、学生は4年間に対しては、きっと、割と満足している感じですよ。立教大学の学生のアンケートを見ても。

○家城 そうですね。卒業時にはね。

○松尾 先ほど江頭君の指摘の中で「1つだけ取っちゃ駄目なんだよ」とか、「これに関連するためにはこういうもの、こういうものとこういうものを取ったら、きっと全体が見えてくるから、そういう学びをちゃんとすべきだよ」という指摘を実感して今やっているから、結び付けて学びができています。

そのときに、履修モデルがあるでしょう。われわれも何とか、こういう学びをしてほしいと思って履修モデルとかつくるわけですよ。そういうものを1年生のときに、参考にしましたか。

○森田 参考にしました。

○松尾 ああ、そうですか。どのように参考にしたんですか。やっぱり、「ああ、これを取るんだ」という感じですか。

○森田 まず1年ではこれを取っていいように思いました。

○池田 その順番なのね。先ほど江頭さんが「強く」とおっしゃっていたので、やはり強く、やはりそこには、ふに落ちるとか納得するということが必要で、ただ文字、テキスト、図の説明を頭で理解するということと、実感する、ふに落ちるといふことは違うじゃない。

○松尾 実感する感じが、やっぱり大事なのかな。

○池田 そうそう。実感する感じがないと、いくら情報だけを与えても身にならないだろうと思うんです。

○松尾 だから今、江頭さんはゼミで実感できているんだよね。

○江頭 そうですね。はい。

○松尾 そうか、こうやって使えばいいじゃないかとか、これは参考になるとか。先ほどのまちづくり論もそうだけれども、ああ、このやり方というのはこうすればいいんだと、実感を伴うよね。1年生のときは、履修モデルを参考にはするけれども実感はわきますか。

○森田 実感はないです。やっぱり経験しないと、実感はわいてこないのだと思います。

○池田 本当の意味で、実感する、ふに落ちるのは、やはりある程度2年の後期や3年にならないと難しいのかもしれない。だから、その1、2年生を誘導するかということが重要ではないですか。

○森田 大学で結構いろいろなプログラムがありますよね。そういうことを、終わりのほうになって知って、ああ、いろいろやっていたんだなって思いました。もっと活用すればよかったかなとも思っています。

○松尾 今、大学で、100を超えるさまざまなプログラムがあるんですね。100というのを考えると、365日のうち200日ぐらい大学にやってきたとしても、やはり2日に1回ぐらいは何かやっているんですね。2日に1回か、3日に1回、

何かやっているんだけれども、授業は授業、正課外のプログラムは正課外のプログラムでしょう、というように独立した形になってしまっている。それがうまく結びついていくと、この学びをしたら、先ほどの履修マップでは、授業での講義はこういうのを履修ほうがいいよということがありますよね。それと関連して正課外は正課外で、こういうプログラムと連動させるともっと勉強になるよと言われると、分かりやすいですね。

○江頭 そうですね。

○松尾 例えば、今、手話などもそうですね。手話を言語の一つと捉えて、全カリで位置付けてきちんとやっている。そうすると、それに対応した正課外のプログラムがあるよと、それを受けてごらんということ、そしてもっとレベルを高かったら、この授業を受けたいよとあって。こういうボランティアがあるから、やってみないかといって、このように流れていく。

今度はこうしたことが、就職活動にも生かされて、例えばキャビンアテンダントの仕事で、手話の能力が評価されたりとか。うまく連動してつながっているという印象があります。そういうつながりが早くからわかっているとよいのではないかと思います。

○加茂 1年生に戻ったらということなんですけれども、今、課題で本を読んだり、論文を書いたりしたときに、考えてみたら1年生のときは何も読んでいなかったなと思っています。本や新聞などもそうなんですけれども、全然触れていなくて、講義だけで満足していた感じなんで、そういうのをもっと読んでいたほうがよかったのかなと思います。

あと、先ほど社会学部の授業も受けていたということを言いましたが、所属学部だけではなく、他学部の授業を積極的に受けるということも大切なのではないかと思います。

○池田 学部の垣根をもう少し低くして、いろいろな履修の仕方を示してあげられるといいのかもしれないですね。

○松尾 先ほど紹介があったまちづくり論のような、横のつながりができるといいですね。自分と少し違うところから、力を得るといのは、大切ですよ。

○池田 刺激になりますよね。他の学部 of 学生を見たりすることで。

○森田 でも正直なところ、キャンパスが違ってしまうと、取りにくいということもあります。

○松尾 キャンパスの距離をどう近付けるかが課題ですね。

○池田 高速シャトルバスを1日10回とか、往復させるとか。

そうすると、キャンパス間の垣根がなくなりますよね。

○森田 部活も、もともと弓道部に入ろうと思ったんですけども。

○池田 みんな新座ですもんね。

○森田 新座だから、どうしようと思つて、迷つてやめてしまいました。

○家城 そろそろ時間が終わりに近づいてきているんですが、今まででほしい、いろいろな学びの中でどのようにしていけばいいかという観点のお話をしていたかだと思います。

最後にもう一度、学修時間というところに戻ってくると、特に、この9月にロイドホールのところ新しい池袋図書館ができましたよね。新座のほうにも新しい図書館が4月からできていて、そこにはラーニングコモンズみたいな、新しい試みがなされています。

こういうものは非常にいい場所だと思うんですけども、今まで、自分でいろいろ学修をする中で、大学の学修環境として、もっとこんなものがあつたら、自分なりにいろいろ勉強できたのになというような点があつたら、今までとは少し話が変わりますけれども、お聞きしたいなと思うんですが。

場所でもそうだし、いろいろなシステム、例えば、私の理学部では、学習支援室というものがあつて、特に、数学などでつまずく人が多いので、そういう人を定期的にサポートする。これは他の大学でもいろいろやっていたりするんですね。

今あるものに関わらず、例えばこんなことがあつたら、あるいは今検討されているものだと、ライティングセンター。図書館の中では、ラーニングアドバイザーみたいなものがすでに始まっているんですが、もう残りあと1年とかそんな時期ですが、何か今までの自分の経験から言つて、こんなことがあつたらよかつたのになということが、もしあれば教えてください。

○江頭 私は、PCの貸し出しが充実していることがいいなと思っています。他大学の人に聞いたら、そういうものはないと言う人もいたので、それをものすごく活用しています。

個人的には、大きい図書館はあまり好みじゃなかったのです。いろいろなところに図書館があつて、どこに行こうかなと、ちょっと楽しんでいるところがあつたので。いろいろな環境でできるということも良かったです。あと、あそこにもみんな集まるんですよ。みんながいて、ちょっと空気が重いなということを感じました。

この前少し歩いてみたんですけども、まだ知らないいろいろな場所がありまして、ちょっとしたスペースだったり。なので、その辺を知つて、今後使っていきたいなと思います。それから、学修環境はすごく整っていると思うんですけど、息抜きの場所もあれば、いいですね。オンとオフの場所がバランスが取れていれば、すごく勉強にも身が入るのかなと思います。

○家城 なるほど。

○松尾 オンとオフね。

○池田 だらだらする場所。

○江頭 はい。あると言えばあるんですけども。

集団で座れる場所はたくさんあるんですけども、個人で落ち着く場所はあまりないですね。

○森田 私も一人ででも落ち着けて、何となくただただできるような場所が欲しいです。学部生室みたいな。院生室はありますけれども。

○池田 ああ、院生室の学生版。

○森田 学部生室ではなくて学科室とか、そこに行けば同じ学科の人が割りというようなスペースがいいですね。ゼミ以外だと本当に全然知らなくて、もうちょっと交流の範囲を広げられるといいと思います。

学科室があればそこでレポートしたり、同じ学科の学生と話をすることができます。

○池田 そうすると先輩が来て、ちょっとアドバイスくれたり。

○森田 いいですね。先輩と何かしゃべりたいです。

○池田 今は縦のつながりが持ちづらいですね。

○森田 縦のつながりがあまりないし、ゼミもその学年だけなので、もっと上下のつながりがほしいですね。

○松尾 なるほど。学科学習室等々があれば、要するに、ゆっくりしながら、学びができるというメリットはありますね。

○池田 あと、縦のつながりですね。異文化は人数が少ないので、それができているんですよ。1年から4年までの縦のネットワークがあるんですけども。

○森田 年々、学生数が多くなっていますか。もう少しコンパクトだったらうれしいなと思います。

○松尾 そうね。今、池袋キャンパスだけでも学生は1万5,000人程いますからね。キャンパスは人ばっかりという感じですね。

○森田 入学したときは、もっと少なかった

ような、建物もそんなになかったような気がします。

○池田 建物は増えましたね。

○森田 大学がすごく大きくなっているなと思って。もう少し、こじんまりしているといいなと。

○松尾 こじんまりとしていないわけだから、こじんまりとできるような空間が欲しいということですね。学科室ね。

○池田 私も、これいいと思いますけれども。可能なのかなというね。

○松尾 確かにオンとオフが切り替えられるような場所ですね。図書館でラーニングコモンズという形で部屋があって、学習室というものがあるんですけども、そういうものじゃないんでしょうね。

○森田 それは予約が必要ですよ。そうじゃなくて、学科ごとに与えられてもっと自由に使えるスペースです。

○池田 文学部史学科の部屋というのがありましたね。

○森田 そこに資料も本もあって。その中で、勉強したりできると良いですね。

○松尾 ごちゃごちゃやっていいよと。で、やっぱり先輩もいるし、同じ学科の人しか来ないから、心配しないでいいよという感じですね。

○森田 そういふスペースが、欲しいです。

○家城 学科ごとの何か独占するようなものがあれば、そこは逆に行きやすいということですかね。ラーニングコモンズは、ああいう共通の場所だから、ある意味使いやすいんだけども、そういうニーズには合っていないという感じですかね。

○松尾 だから、垣根をなくすということと、垣根をつくって自分たちでゆったりと、という部分も、きっと両方あるんだね。

○池田 履修の垣根は低いほうがいいんだけど。

○加茂 確かに、ただただできるところ

も良いと思いますが、学科室となると、行く人と行かない人に分かれるなど思います。あまり内輪になり過ぎてしまうと、部室みたいにもなってしまうし。コミュニケーションがうまくできる何かがあればいいと思うんですけども。

私は、学習環境について3点あります。まず、図書館が24時間開いていたらいなと思います。分からないところがあって、調べたいなと思ったときに開いていないときがあるので。2つ目ですが、新座のパソコンの貸し出し数が少なすぎる気がします。

レポート期間等も、すぐに埋まって借ることができないときが多いんです。それから3つ目ですが、新座から池袋、池袋から新座の授業を受けたいときに移動しなくてもいいような何か。例えば、テレビ中継などがあれば、自分ももっと受けたいと思います。

○池田 テレビ会議室のようなシステムですね。

○松尾 いいですね。ただ一つ問題は、テレビ会議は何回かやっているんですけども、「何か遠い世界でやっているよね」というような感じになるから、あれをリアリティーを持ってできるような空間にしてほしいですね。

○池田 サテライトのようなシステムは、代ゼミとか、いわゆる予備校がたくさんやっていますよね。すごくいいでしょう。国立大学は持っていますよね。

○家城 それはあります。

○加茂 キャンパス間の移動に関しては、お金もネックになって、行かない人も多いと思います。往復に600円ぐらいかかるんです。定期がない人は、池袋キャンパスまで自己負担で切符を買っています。

○家城 いろいろご検討いただいて。先ほどの学科別の部屋という話がありましたけれども、例えば、オフィスアワーってありますよね。

○森田 オフィスアワー。ああ、はい。

○家城 そういうところに学生が集まるということは、あまりないんですかね。オフィスアワーは、あまり使われていないですか。

○家城 先生のいる場所は、あまり居心地はよくないでしょうかね。

○池田 それは先生によりますよ。異文化は結構、学生とお昼食べたり、何かあると相談したりということはあるけれども。ただ、先輩との縦のつながりはできないですよ。

○森田 はい。

○家城 他に、理学部ですと、卒研生や院生が結構いて、TA (Teaching Assistant) をやっている学生もいるので、そういうところに聞くというケースがあって、それで縦がつながっているということもあるんですよ。

○池田 理学部の先生のお部屋は、広くないですか。

○家城 あれは、実験室があるから。

○池田 そうそう。だから、たまりやすいけれども、普通の部屋で学生何人もというは、ちょっと難しいですね。

○家城 難しいですかね。新たなスペースは難しいけれども、そういうスペースが使えないかなと、ちょっと思ったんですけどもね。例えば、同じ科目を取っている人が集まるとかね。なかなか、オフィスアワーは使われないですよ。待っていても、全然来ないときもあります。

○池田 もう少し学部の授業の中で、グループディスカッションやグループワークということが普通の授業の中に組み込まれると、その授業を履修している人は学年がばらばらだったり、同じ学科の人だったりということもあると思うので、そういうところで縦のつながりができることもあるのかもしれないですけどもね。ただ座って先生の話聞いて解散してしまうのではなくて。

○松尾 ご指摘のように学生同士の縦のつながりを作りながらそれを学びに繋

げること大切だと思います。なかでも学生が学生を支援するというか、例えば、2年生の学生達が1年生を支援する。そして1年生が2年生になったら1年生を支援する。そういった学びの伝承というか、学生同士の伝承スタイルみたいなものが、しっかりできれば素晴らしいと思います。

例えば、キャリアサポートに関して、全学的にもキャリア塾等がありますが、学部でやってみようということで、昨年から内定が決まった4年生が、3年生に対してプレゼンや説明をするという機会を設けています。今年度は、2012年11月に開催しました。全体で、100人を超える3年生が集まり、内定の決まった4年生が領域別に9場所に分かれて、時間を決めてプレゼン、質疑応答をする。3年生は真剣な眼差しで聞き、質問をする。このような取組をやると4年生がものすごく伸びる。4年生がきちんと説明してあげないといけないから、事前に何回も練習するわけですよ。練習して、「そんなことじゃ、3年生に伝わらないよ」という意見があると、さらに練習する。このプログラムを通して3、4年生の関係がすごくできてきていますね。主体的な学びを引き出すという意味では、「後輩に教える」となると、すごく気合入りますよね。

○江頭 そうですね。はい。

○松尾 体育会やサークルの活動のように正課外活動では、先輩が後輩を教えるということはよく行われていますよね。正課の学びの中でも、学びの伝承みたいなものが学生間の中で行われるような仕組みがあって、教えながら学ぶという仕組みが、教育の全体のカリキュラムの中にできてくると素晴らしいと思いますね。

○池田 ラーニングピラミッドで一番低い、つまり、学ばないのが、講義形式で、一番高い、つまり最も学ぶのが、人に教えるということでもんね。他人に教え

ることで最も学ぶんですよ。

○松尾 「教えることとは学ぶこと」といわれますが、教えながら学ぶ主体的な学びの引き出し方というのが重要だと思います。

○池田 そうするとやっぱり学部にも工夫が必要ですよ。

○松尾 そうですよ。学部のカリキュラム体系みたいなものも、そういう形の中でつくられていくような仕組みも必要ですね。

○家城 そろそろ時間になりましたので、きょうの座談会をこれで締めたいと思います。なかなかこういう問題は、ぱっという解答はないんですけれども、いろいろな問題や、それから、今後考えるに当たってヒントになるようなことを、いろいろご指摘いただいたと思いますので、ぜひこれを大学側としても生かしていくようにしていきたいと思います。ありがとうございました。

○一同 ありがとうございます。